

インフォームド・シチズン* を育てる哲学教育

ダリル・メイサー, Ph.D

(ユネスコ・バンコク

人文社会科学部門アジア太平洋地域ユニット(RUSHSAP)

リージョナルアドバイザー)

倫理学とは、選択と決断がもたらす利益とリスクを考量する概念である。倫理学の遺産は、潜在的には世界中のすべての文化、宗教、古代の書物のうちに見いだされうる。[倫理学の]諸問題は社会の中にある人間存在と自然や神との関係に関連するが、それらの諸問題は人類が誕生した瞬間から大きくなり始めた。教師たちが成熟社会をつくるという、より広い文脈において特別な貢献をなすよう、どのようにして力を与えることができるだろうか。成熟とは、人間あるいは社会が利益とリスクのバランスを量ることができるようになること、そして考え抜かれた決断を下すことができるようになること、そしてそれについて話し合うことができるようになることを意味している。

2009年に採択された「アジア太平洋地域における哲学教育推進のためのアクションプラン」(Action Plan for the Promotion of Philosophy Teaching in Asia and the Pacific)——『未来のために考える』“Thinking for the Future” と呼ばれる——では、哲学教育の諸目標が設定されている。[設定された諸目標とは、第一に]歴史教育のいくつかの選択された事例を通じて、学際的知識の発展、概念の明確化、知識を統合する能力の向上を図ること、理性的に討議するための諸原則と議論法を学び、問いの力についての理解を深め、知性の地平を拡大し、異なる共同体における文化的諸価値についての知識を増し加えて、より良い人生の意味を探求し実践するといったような知恵の探求に関連する目標を含む。以上のような哲学教育の諸目標は、どのように教えることができるのか、考えてみたい。加えて[第二に]哲学教育の諸目標は、例えば賢明な判断力、意思決定スキル、知識を解釈し、構築し、伝達する能力の開発を含みうる。さらに[哲学教育の目標の]第三の系列は、知識とスキルを善用する素質を伸長すること、価値観、民族性、文化の違いを尊重しながらあらゆる形態の生命への尊敬を高めることなどである。歴史教育は、これらの諸目標を達成するものとしても、あるいは達成を阻害するものとしても機能しうる。それゆえ、われわれは教育にあたって提出する事例の選択と解釈には十分注意深くあらねばならない。

どのように激動する時代に立ち向かうか、それを学生に教える準備を整えるにあたって教師が必要とする、最低でも4つの戦略がある。

1. **記述的研究 (descriptive studies)**: 人びとが現状に精確なしかたで接近することを可能にするための研究。人びとが自分の生活をどう見ているのか、生活の中で他者と、どのような道徳的な交流を持ち、責任を分かちあっているかを理解する。
2. **指令的倫理 (prescriptive ethics)**: 倫理的にみて、何が善であり、何が悪であるかを、またそうした決定を下す際に、どのような原則がもっとも重要であるかを他者に教える。また、それは何があるいは誰が権利を持ち、他方、それら・彼ら／彼女らにたいして義務を負っているのは何あるいは誰であるかを教えるものでもありうる。政策決定や法律とも関係し、人びとが良き決断を下すために力を与える。
3. **双方向的倫理 (interactive ethics)**: 社会の中で生きる人間とその集団のあいだでの、他者と調和的に生きていくために必要な討議と討論。激動する時代における緊張関係は、われわれがどのように協調するかを人びとに教え、また専門分野の境界、文化、宗教、イデオロギーを超えて交流し得るよう、どれだけ教師の力量を高めることができるか、それによっていっそう緩和される。
4. **実用性 (practicality)**: 実用的であることは、もし教師が教育を続け、また学生が興味を抱き続けることが期待されているのであれば、きわめて重要である。

本報告では、様々な社会的問題——環境倫理及び医療倫理——に関する諸事例を用い、これらの諸相(1-4)のいくつかの例を紹介する。グローバリゼーションの時代に、どのようにして思考と個性を促進するのか？ テクノロジーの急速な進歩は、われわれがいま立ち向かう試練へ導いた。従来の人間関係において機能してきたシステムとパターンはすっかり変化した。

ユネスコは、バイオエシックスへのグローバルな要求に答えるべく、これらの試練に応じてきた。科学技術倫理とバイオエシックスに関する国際基準の実施は重要である。ユネスコは3つの「バイオエシックスについての国際宣言」を総会において満場一致で承認した。バイオエシックス教育の諸原則とそれを地域に普及するためのアクションプランは、2006年にユネスコによって開発された「バイオエシックスにおける地域ネットワークのためのジョイントアクションプラン——より良いバイオエシックス教育に向けて」“*Joint Plan of Action for Regional Networking in Bioethics Education Towards Better Bioethics Education*” において大要をまとめられている。

政府及びバイオエシックス教育に携わるすべての人びとへの要求は、バイオエシックス教育に関してユネスコに加盟するすべての国々によって採択された宣言、とりわけ「バイオエシックスと人権についての世界宣言」(Universal Declaration on Bioethics and Human Rights: ユネスコ総会で採択、2005年)においてなされた公約で、以下のように示されている。

「第23条 (i) この宣言において定められた諸原則を普及し、科学とテクノロジーの発展の倫理的含意についてのより良い理解をとくに若い世代において達成するために、国家はすべての教育段階でバイオエシックス教育の発展に力を入れるとともに、バイオエシックス教育についての情報と知識を普及するプログラムを奨励しなければならない。(ii) 国家は、国際的・地域的政府間組織及び国際的・地域的・国内的NGOがこの努力へ参画することを奨励しなければならない。」

倫理学と哲学の教育においては、理論的な導入のみならず、倫理的ディレンマの事例を明らかにし、学習者がそれぞれにディレンマを解決すると同時に倫理的諸問題を確認するのを助けるためのいろいろな参加型の活動がある。また最近、ユネスコは「バイオエシックスについてのコアカリキュラム」に加えて、さまざまな教材や方法を開発した。その一例がダリル・メイサー著『バイオエシックス教育のためのモラルゲーム』(ユネスコ・バイオエシックス講座、2008年)である。教材のサンプルと参考資料はウェブサイトですべて入手可能である(www.unescobkk.org/rushsap)。

他者のみならず自己のより良い理解を発展させるためには、対話がきわめて重要である。現代では、倫理学と哲学の教育は、世界中のほとんどすべての地域で、その中核において西洋の哲学者が支配的であるような内容のものである。このことは、過去200年間にわたって、ヨーロッパの言語で書かれた出版物が支配的であったことや哲学の学位が北アメリカとヨーロッパで数多く出されてきたこととも関連している。世界の多くの地域の豊かな哲学的伝統についてのローカルな、地域的な、そしてグローバルな認識を強化するために、ユネスコ人文社会科学部門哲学プログラムは、2004年には地域間の哲学的対話に関するプログラムに着手したが、その成果の一例が、ユネスコバンコクとユネスコラバトの協力により実現した「アジア-アラブ地域間の哲学的対話」(UNESCO Bangkok and UNESCO Rabat in Asia-Arab Inter-regional Philosophical Dialogues) である。

* 情報へのアクセスを保障され、主体的に判断を下すことのできる市民

(原文は英語、翻訳:望月太郎)